座談会

我らにとっての「土を考える会」

チャレンジ精神と夢を育んだ あの日の出会いから19年

スガノ農機と、同社と活動を共にしてきた全国土を考える会（前田喜芳会長）のこれまでの取り組みは、乾田直播の普及を含めて我が国の水田農業のイノベーションに重要な役割を果たしてきた。これからさらにその役割が大きくなると思う。

しかし、菅野充八前社長を追放し、会社を乗っ取ってしまった。土を考える会はその首謀者としての大森聡氏他の新経営陣が会の理念を正しく承継していないという理由から、同社を土を考える会の幹事と認めないという判断を下した。その上で、同社に対して土を考える会の会費を管理する口座の通帳および印鑑の返還を求めた。しかし、それはいまだに実行されていない。

一方、スガノ農機の株式の51%を所有する菅野充八氏は旭川地方裁判所の承認を受けて6月12日に臨時株主総会を開催し、全役員を解任するとともに、新たに村井信仁氏を代表取締役に選出し、菅野充八氏、菅野鋭三氏を取締役として再任した。

それにもかかわらず、新社長に選任された村井信仁氏は同社に出社できていない。同社の労働組合を牛耳る東京管理職ユニオンに指導された組合員がピケを張り、新社長が出社できないという混乱状態が続いている。

村井新社長の選任は、土を考える会のメンバーの意向を菅野充八氏に申し入れて実現したものである。そして今回の役員人事が、菅野充八氏や創業家の復権を狙ったものではなく、スガノ農機の存続発展に大きな意味を持つ同社及び土を考える会の理念の復権を目指したものである。こうしたスガノ農機の状況に関しては「江刺の稲」の記事を読んでいただきたい。

そこで、今号では土を考える会の精神とは何であり、その成り立ちから会員とスガノ農機との関係性を再確認するために、1996年発行の本誌17号、18号に掲載された北海道土を考える会創立メンバーと当時の若手会員を含む人々で行なわれた「我らにとっての『土を考える会』」というテーマの座談会を再掲載する。

北海道土を考える会の発足の経緯、そこで何が語られ、どのような活動をし、スガノ農機がどのような役割を果たしてきたかをご理解いただければありがたい。そして、読者一般やスガノ農機の経営陣だけでなく、そこで働く社員の皆さんに40年前に発足した北海道土を考える会の理念が、現在という時代にとってどれほど大きな意義を持つかを再確認していただければと思う。これは、同伴者であったスガノ農機と土を考える会のメンバーがまたかつてのような関係性を取り戻すことを願ってこの記事を再掲載するものである。

「北海道士を考える会」（小野寺俊幸会長、事務局＝〒071－05・北海道空知郡上富良野町・スガノ農機上富良野営業所内　TEL0167－45－31 51）は、昭和53年6月に、北海道の有力農業経営者27名が「土と経営」について語り合おうという小さな集まりから始まり、今年で創立19年を迎える。

現在の会員は北海道のトップ農家と呼ぶにふさわしい農業経営者と協賛企業（約40社）など830名の組織に成長し、全道・4支部に分かれて活動している。北海道という地域性はあるにせよ農家自身で運営する組織としては最も優れた経営研究団体の一つだといってよい。同会では毎年7月に北海道上富良野町のホワイト農場を中心会場にして講演会と同志交歓会、および協賛農機メーカーの機会展示実演会「北海道農業機械フェア in Kamifurano」を始め様々な催しを開催している。同展示会は全道だけでなく府県からも北海道ならではの畑作機械を中心とした機械類の実演の見られる展示会として多数の参観者を集めている。

新しい機械情報の収集とともに地域を超えた経営者との出会い、その経営と技術を学び、勇気を確認し合う同志交歓会は夜を徹しての集会になるのもしばしばだ。

ここでは、創立19年目を迎えた同会の創立当時からの会員と現会長の小野寺氏などの北海道経営者たちに「北海道士を考える会」を通して学んだこと、後を引き継ぐ若手メンバーたちへの伝言ということだけでなく、全国の農業経営者たちや農業に関わるすべての関係者に勇気を与える話題であるはずだ。

また、座談会には、同会の顧問的役割を果たしてきた村井信仁氏（北海道農業機械工業会専務理事）に加わっていただき、司会は長く事務局に携わってきた「土の館」館長である穐吉忠彦氏にお願いした。

（平成8年6月6日／札幌市）

前編
1996年6月号

チャレンジ精神と夢を育んだ日の出会いから19年

司会（穐吉忠彦）　本日お集まりいただいているのは「土を考える会」の長老格の会員である「積年会」の会員に加えて、いわば現役組の「青年会」を代表して現在の「北海道土を考える会」の会長である小野寺俊幸さんです。天候異変のために一部の方が欠席となりましたが、創立当初のメンバーの中から各支部を代表してお集まりいただきました。皆さんの人柄やリーダーシップ、そして皆さんの経営が刺激剤となって会員を勇気付けてきたとも思えます。また、村井先生は、側面からというより真正面から土を考える会を育ててきて下さった方です。

まずは発足当時から今日まで中心になって活躍してこられた皆様に、昭和53年こんなことからはじまったという思い出話から入っていただきたいと思います。

他人の話で、自分の現在を確かめたかった当時の我ら

勝部征矢　土を考える会の発足の5年くらい前から、年に1、2回、宮北健一郎（広島町・前会長）さんだとか、江別の中島邦彦さんなどの集まりがあった。北海フォードトラクタ（現日本ニューホランド）の当時の社長の息子さんの発案で札幌圏を中心にした、どちらかと言えば地域色のあるものだった。フォードユーザーの集まりから始まったのではなかったかと思う。

そこに来ていた人たちは、当時としては風変わりというか、標準からかなりかけ離れた経営だったわけですから、自分たちがやっていること、考えていることが、これでよいのかという不安もあったのです。それを皆と会って自分の考え方を確認する場所だったわけですね。それでまた家に帰って頑張る。

そこにスガノの中山豊一君（現同社常務取締役）が参加するようになって、札幌地区だけでなく全道的な集会にしていったらどうかといった発想で「土を考える会」がスター

トしたような気がする。

参加者たちのゴツイ経営内容に驚きファイトを燃やした日々

司会　53年の設立総会の時の皆さんの熱気はすごいもので、集まりをここで解散しちゃ駄目だ、各地域の役員を決めていこうという具合になっていったと思います。同時に、当時50歳で年齢の高い方だった石川さんが、奴らに負けるものかと意気込んで帰りのバスの中で次の仕事を考えていた、という話を後で伺ったことがありましたが、石川さんはどうですか。そんな出会いを各地域に持ち帰ることで発展していったようにも思うのですが。

石川武　実は53年の時、スガノの美幌営業所の所長から集会に誘われたんですね。土の会を作るとか作らないとかの話はなかった。ただ、全道から27人の人に集まってもらって、土作りという一つの問題を話し合うがどうだろうかという話だった。その時ただスガノのプラウの実演をするだけなら俺は御免こうむるからなと言ったら、絶対そういうことはないというので行ってみたんです。網走地区というか道東からは私を含めて4人だった。

いざ行ってみると、当時は網走の4つの農協の間でさえも壁を打ち破って交流するなんてことはできなかったわけですから、そのことだけでも刺激を受けた。でも、それ以上に配られた参加者名簿をみて驚いた。当時、私は90なんぼの面積だったからまず畑作経営としてはピカ一だろうと思って行ったわけ。ところがそうはいかない。勝部さんが130町ですよ。牧野さんは230町、中島さん150町という。牧野さん、中島さんは草地を含めてだけど、その他の人たちもいずれにしてもゴツイのです。それで聞き直したのです。「本当か?」とね。それでさらに勝部さんに「何を播いてんだ」と聞き返したら、なんと麦だという。そしたら横から牧野さんが、身体はゴツイのに話し方は優しい声で「本当だよ、私は勝部さん所で麦作りを勉強しているのだから間違いないよ」ってね。これだけは忘れられないよ。その上、私らの方では麦の連作はできなかったのですが、勝部さんところでは20何年やっても何ともないよとおっしゃる。それで、皆とあらためて勝部さんの所にお邪魔したのです。実のこと麦一面ですよ。その時に30分早くお訪ねしたら、勝部のお爺ちゃん（徳太郎氏）に「30分早いじゃないか」と怒られましたよ。それも忘れられないのだけど（笑）、実際目で見て、耳で聞いて、その麦があったわけだ。

開会の挨拶を中断させた石川氏の再開の呼び掛け

司会　あの時、石川さんが会の発足を提案されましたね。

石川　53年の創立の時、呼びかけた側はそうなることを見越していたのかもしれないけど（笑）、最初はその時限りの集まりの予定だったですよね。でも私にしてみればそれはほっとけなかった。実は、スガノの社長が最後のお礼の挨拶をしかけた時に、ちょっと待ってくれ、網走ではこれだけの話はなかなかしゃべれない。毎年この仲間でやらないか、とチョット漏らしたら「そうだそうだ」という感じでみんなも賛成してくれた。勝部さんなんかがうまくまとめてくれたわけだけど。それで、宮北さんが会長ということで始まった。でもあの時何ですんなり会長が決まったんだっけ。

司会　その日の会合の発起人代表が宮北さんだった。

勝部　たまたま、さっき話した集まりの会長を宮北さんにやってもらっていたから。自分らにしたらその延長のような気がしていたから。

石川　土の会の結成の時に、家に帰るバスの中で、これはぜひともうちの方でも会の支部を作ろうじゃないかと皆で話し合っていた。だから、支部の結成は道東が一番早いはずですよ。第2回目の時だから、その承認をしていただいたのは。地元に帰って皆に話したら2回目には10何人がきたのですね。勝部のお爺ちゃんの講演を聞いたのは2回目の時だったか。それを聞いた地元の者たちが感心しちゃったわけだ。それを皆にふれてまわってドッと支部の会員が集まったと思う。

この会合を発足して多くの素晴らしい経営者と交流をさせていただいて、何というか、ファイトというか生きがいみたいなものを感じましたよ。ヨシ、勝部さんに負けるものかってね。やはり勝部さんが一番の目標になりましたからね。それが今日までつながっているのだけど、俺らも年取って、次の世代に移っていくのを見ると、自分たちが作った会だけどたいした会だなあと思って。この会がいつまでも続けばいいなと思ってますよ。

あの出会いがなければ今の自分はないだろう

司会　ところで駒谷さんが入会され

たのはいつになりますかね？

駒谷信幸　勝部のお爺さんのお話を聞いた記憶がありますから2回目からでしょう。たまたま宮北さんたちと同じ長沼の生まれということで参加させていただいたと思います。皆さんの自己紹介で話される面積を聞いてびっくりしちゃって。僕はその当時、水田50haと畑が20haで70haくらいあったんだけど、恥ずかしくて目を見られなかったね。その位びっくりした。46年にアメリカに視察に行って、国府田農場さんの１８００haとかの水田を見てきて少し外国を意識するようになったんだけど、北海道の中にもこんな素晴らしい人がいるんだと思った。僕はその頃、ここまでできたから後はゆっくりやろうくらいに思ってたんですけど（笑）、これで燃え上がりましたね。

司会　3、4年続けた頃ですか、土を考える会は大規模農業経営者達の集まりだから、平均的な20haくらいの規模の経営者の方から我々の話す仲間ではないと思われて、事務局としては苦労した時代もありました。最近はかなり変わって広く認知されるようになってきましたけど。その当時、駒谷さんの所にお邪魔して、強烈な印象を受けたのを覚えています。その時、自分は堆肥が欲しくて豚屋さんを自分の土地に呼び込んだ、と。そしてここで経営してもらってそのカスを貰うんだ。そのカスこそが一番の儲け所なんだといっておられました。その上、家から１８０㎞も離れた様似町に肉牛の牧場をこれから作るという。その夢の壮大さに驚きました。

　ところで去年、本別の農業大学校の経営者のための研修コースの方々が土の館に来られたのですが、36名の中で女性が一人いました。それが駒谷さんのお嬢さんだというじゃありませんか。酪農学園大学で獣医士の資格を取られた上でその牧場をやっているというじゃありませんか。弟さんがお父さんの水田の部門をやるだろうとおっしゃる。さすが一家をあげて夢を果たされているなと感動しましたよ。

出会いに触発されて始めた仕事を受け継いだ私の後継者たちのこと

駒谷　僕も、土の会に参加させていただけなければおそらくあんな牧場なんてやらなかったと思うのですよ。水田では１００町くらい作ってみたいと思っていたのだけど、転作転作で土地を持っていても作らせてもらえなかったから、限界を感じてたんですよ。法律的に50町以上作っちゃいけないなんていうことはないが、もう遠慮せよって感じで50町以上は買えなかった。そんな事情で畑や水田では近くで手に入れられない。しかも米では豊作だと翌年は減反。農業者にとってはたくさん獲れることが喜べないという辛い時代になっていた。それで肉牛に入った。

　子供たちのことですが、あの当時から後継者問題がよく語られていましたが、僕は子供たちに、息子だからといって後は継がさないと常に言っていたのです。農業が好きな本当にやりたいと思う者にやらせるべきなんだって。子供が継いでくれたらいいなという思いはありましたけどね。そしたら娘が農業やるって言い出しちゃった（笑）。

　あの子は三女なんですが、小学校の4年生の冬に、牧場に連れて行って子牛の治療を手伝わせた。注射打たせたりして。だけど子牛は死んじゃった。子供はかわいそうだといっていつまでも子牛を撫でている。僕は記憶が無いのだけど、その時に「お父さんに獣医の資格でもあれば助けられたのかもしれんのにな」と僕がいったというんですよ。その時に獣医になって、牧場やろうと決めたというんですよ。3月に大学の先輩と一緒になって牧場を継ぎますけど。

　設立の翌年から試験場の先生として指導的な立場で見てこられた、この会の顧問役である村井先生どうですか。

篤農家の話は篤農家が聞くから分かるし、響き合う感動がある

村井信仁　今お話を伺っていると、この会には地域の壁を越えて仲間を作り、勉強ができる魅力がある。また、農家同士だけでなく、農家とメーカーとの壁を越え、そのつながりを強化する役割も果たした。

　私1回目は参加していないのですが、それ以前に菅野祥孝さん（スガノ農機㈱社長）が、十勝農試の私の所に見えて、北海道の土を徹底的に知る方法はないだろうかと相談を受けたことがあった。当時の北海道のメーカーは、春農機と夏農機と秋農機を持つというのが一つのパターンだった。それで工場をうまく回していた。反対にスガノさんは最初にカルチベータをやめて、それから当時としては良い機械だったビートハーベスタもやめてプラウ1本にしたいというのです。その頃になると、小麦が入ってきて夏起こしをやるようになっていたし、機械化体系が整ってきて農家にも労力の余裕が出てきたので秋起こしもできるようになっ

てきた。そんなんでプラウだけで工場を稼働させるという条件が揃ってきた。しかし、プラウというのはその地域の土を知っているメーカーでないとできない。それで菅野さんとしては土を徹底的に知る方法はないかと考えられたのだろう。それなら、篤農家に聞いたらよいといった。篤農家は土を大事にするから生産性が高く、だから篤農家なんだ。各営業所にお触れを出して篤農家を出して話を聞いてみればよいではないかといったのです。そんな話がありました。それが直接的なきっかけになったかどうか分かりませんが、先程の勝部さんのお話にあった農家の集まりがあり、菅野さんにしても篤農家と話す機会を持ちたいという思いが一つの形にリンクしての27人の会合になったのではないかと思うのです。それが意外なところに発展していくのですね。

篤農家の話は篤農家が聞いて一番面白いのです。同じ苦労している篤農家でないと分からないわけです。その人たちは、ちょっとしたヒントにバーンと反応する。だから、理解もできるし刺激にもなる。そうすると、さっき石川さんがいわれたように、1回だけの話じゃ駄目だ、来年もやるべということになったのだと思う。勝部の爺ちゃんを訪ねるとお前は小麦と話ができるか、できない奴は帰れ帰れという。小麦と話ができる奴に俺の話は通じるのだという思いがあるようにね。篤農家同士の共感のようなものがあったのだろう。一流の人たちが集まったから、かなりハイレベルの話がなされたのだと思いますよ。技術的な啓蒙であれば一年ですむわけがない。

53年、54年と続けて、参加者からスガノの製品に対していろんな文句を付けたけど、スガノは本当にそんなプラウが作れるのか、それじゃ実際に作ってやってみようというような話になった。スガノさんだけじゃしょうがないから、会の趣旨に協賛できるメーカーにも集まってもらい展示会も始まる。研修会をやる。そうすると上質の新しい情報が幅広く入ってくるようになって、土を考える会というものが固定していったのだと思います。まあ、展示会と研修会を軸にしたこの会は、できるべくしてできたといってもよいが、進めてきた人たちからすると意外な発展をみたというのも、本音ではないでしょうか。

悲壮な覚悟の親父の世代、家族で楽しむ息子の世代

司会　取り上げるべきテーマについて、先生にも相談にのっていただきました。また、外から見た会の変遷を少し。

村井　テーマとしては、最初はとにかく麦がすべてだという感じだった。昭和47年位から小麦の作付けが奨励されて、53年当時が一番小麦が増えてきた時代だったから当然だったのでしょう。

53年の最初のテーマが「土を考えよう」で、次が「麦」「麦と草と土」そして「土と機械」という風にだんだん幅を広げていった。そして、第5回くらいまでが土を考える会のいわば創生期だったのです。その時代は、まさに同志交歓会であり、篤農家が自分の得意分野を話しあって自分の技術を披露し、それを学び合うといった感じでした。その頃、勝部さんがよく研究会の司会をされてましたよね。

その次の5年くらいで発展期に入っていくのだと思うのですね。「土と機械と英知」「ニューマシーン'83」「気象と機械」「土づくり'85」とテーマも少し変わっていく。各界の先生の講演を聞く。同志交歓会は相変わらず、と。

そしてその次の5年くらいが成熟期ですね。「農業変貌」とか「勝負元年」「百姓一揆」とかのテーマでね。しかし、この辺から参加人数が少なくなってきて、夫婦仲じゃないけど

座談会出席者 PROFILE



穐吉 忠彦 氏
「土の館」館長
（空知郡上富良野町）

昭和5年常呂町生まれ。同地で約10haまでの規模拡大をはかったが、その後の拡大が見込めず昭和43年離農を決意、スガノ農機入社。48年同社常務取締役、51年専務取締役に就任。平成2年、健康上の理由で同社を退社。その後健康を回復し「土の館」建設準備に奔走し、開館と同時に館長に就任後、現在に至る。「土の館」館長として、農家ばかりでなく都会の住民に対しても、土と農業と食べ物、そして農業者の夢を伝える様々なイベントを企画している。



勝部 征矢 氏
農業
（夕張郡栗山町）

昭和13年栗山町生まれ。大規模小麦作の技術と経営で土を考える会のシンボル的存在でもある徳太郎氏の長男であり、同会の創立当時からリーダー的存在であった。畑には人が通れるほどの暗渠を作るなど独自手法の基盤整備を自らの手で行ない、栽培上の問題もなく150haに小麦を連作している。早くから250馬力のゴムクローラトラクタ・チャレンジャーを導入する等、麦作の機械化においても日本でトップの存在といってよい。現在、征矢氏と二人の後継者が農場を経営している。

倦怠期に入る（笑）。最初に創設に参加された方々が、家督を息子にゆずるような時代にもなって、時代の交代とかも感じられるようになる。これではいけないという議論もされるようになって、それで16回あたりで役員を交代して世代交代をしようという話になった。先輩たちの「積年会」と若い人たちの「青年会」という組織にしたのもこの時ですね。それがいわば転換期に入った時代ですね。それに第16回からは、事業の運営がよりオフィシャルになりましたね。これだけ大きな幅広い機械展示会をやっていて、事業名と団体名が同じなのはおかしいという議論はそれまでもあったわけです。名前ももう少し世間に認知されるようなものにしようということで、イベント名は「北海道農業機械フェアin Kamifurano」と変えていった。それで現在に至るわけです。

小野寺さんが会長になって、いい意味で体質改善が図られて今に至ります。昨年あたりから女性・家族参加という色合いも強くなってきていますしね、婦人フォーラムや即売会などもやってだいぶ様変わりしているかなって気がします。最近の若い人は家族を大切にしますが、大変いいことだと思うのです。今まで親父が悲壮な覚悟でやっていたのを、今度は家族ぐるみでより良い内容に考えていく、そんな時代になってきていると思います。

農業は作れば売れるという時代は終わり、どうやって売れるものを作り、また売るかという質的な転換期にきている。農業もこの会も規模の拡大と質的な転換という難しい時期にきているんじゃないかと思うんです。創生期のメンバーたちが、それぞれの地域で頑張って支部を作り、刺激しあって大きく発展したように、今この転換期も乗り越えていくのでしょう。

幅広く開かれた組織 社会的認知を得た事業「土を考える会」

司会　北海道農業機械工業会との関係を話していただけませんか。

村井　工業会との関係は、私の前の専務理事が土を考える会に参加して、「すごく熱心な同志交歓会をやっている」と感動して、機械化の研さんを深めるのにこんな素晴らしい団体はないということで、会を後援することを理事会にかけたわけですね。そうしたら案の定、あれはスガノの会じゃないか、なんで特定の会社の事業を後援するんだという話になったそうです。だけど、スガノが応援しているかもしれないけど、土を考える会が役員を構成してやっているのでスガノではない。「だから後援すべきだ！」といって決めたらしいです。私はその後をついで平成元年に専務になったのですが、私の代になったら主催団体に入ってしまった（笑）。

その時も理事会にかけたら後援ぐらいでいいんじゃないのという意見がでたのですが、そうじゃないといったのです。皆がスガノさんがやっているというからおかしくなるんで、これだけのオフィシャルな会なのだから、認可された団体が加わって、もっと大きく発展させようじゃないかとね。新しい技術発展のために何をはばかる必要があろうかといってね。それで農業機械工業会も主催団体に加えさせていただきました。さらに昨年からは北海道農業機械士協議会も主催団体に加わり、土を考える会と合わせて3団体でやっています。北海道の農業機械士は約７０００人いるのですから、その現役の若い気鋭が加わるのは価値がある。これからはもっと幅広くみんなで相談して新しい協力方法を作ろうということです。いずれにしても土を考える会とあわせて3団体でもっと内容を豊かにしていきたいと思います。

作業の大変さより話を聞く楽しみにワクワクした自分

司会　設立当初から関わっている事務局を代表して田村君、どうですか。日常の会社の仕事をしながらでは一つのイベントをやるにしても大変でしょう。なぜそんな大変なことを今まで18回もやってこられたのでしょうね。その原動力みたいのは何なのでしょうね。ただ社長に命令されたからだけではできないでしょう。

田村政行　今、皆さんの話を聞いていると最初の頃の記憶がまざまざと甦ってきます。確かに前後の準備は大変ですけど、あの当時は苦にならないし非常に楽しかったですね。例えば夜中皆さんがずっと話している姿を横で聞かせてもらっているとワクワクして、いつもメモを取っていましたよ。勝部農場とか、石川農場とか、斉藤農場だとか、話せといわれたらいくらでも話せる農場ストーリーがありましたね。で、話を聞いて農業って本当に素晴らしいんだなと思いました。こんなすごい仕事にスガノに入って携わらせてもらって本当に良かったなと思った。おかげで富良野の水田農家の嫁さん貰ったんですけど（笑）。それで義理の親父から聞く農業の話が、機械屋の立

後編
1996年8月号

土地の名義は自分のものでも、それは預かり物だと思え！

本誌　先程食事をしているときに石川さんが、第1回目の会合で勝部農場の面積やその売上を聞いて自分の頭をハタかれるような気がしたと話されていました。人は誰でも社会の中での自分の位置を気にして生きている。しかし、大多数の人々が比較対象にしているのは「平均」と自分との偏差だと思います。自分が平均的地位にいることに安心し、自分より下に誰かがいることで己れの自尊心を保っているようなところがあります。

しかし、土を考える会の仲間というのは、常に「最高」を見ようとした。「平均」ではなく「最高」と自分を比べてどれだけ自分が劣っているかを謙虚に見つめ確認しながら、上にそして未来に向かって歩もうとされる。より優れた人がなしえたことにチャレンジする精神。そして、その仲間同士が驚くほどオープンに教え合い学び合う。自立した個性ある者たちが競争の中でこその協同性を持ち続けている。こういう人のつながりというのは農村社会の中では極めて稀なことですが、それがなぜできたのか。

また、後継者たちに向けての話題ですが、かつて開拓地に入植した先人たちは今では想像もつかないような苦労の中で開拓を進めてきたわけですが、彼らには夢があった。夢を見る勇気があったのではないかと思います。ここにお集まりの土を考える会のOBメンバーともいえる積年会の方々もすでに入植から二世代や三世代を経ていながらも、そんな未来へチャレンジする勇気をお持ちであったと感じます。そういう時代だったのかもしれません。だとしたら現代の若い後継者たちは、開拓者たちの、そしてここにお集まりの会の創立メンバーからその精神をどう受け継ぐべきなのでしょうか。人間というものは喰えるようになると安

「土を考える会」はスガノに必要な社員研修の場所だった

それともう一つ、土を考える会の発足の思い入れを社員の立場で見ると皆さんとは又全然違うんですよ。ある時、トラクタメーカーから輸出用の耐久テストをしたいから畑を紹介して欲しいという話が来たのです。あのころに畑を貸してくれる人なんかいませんよね、6月からの1ヵ月間ですから。たまたま上富良野の伊藤孝司さんが林地開発で山を崩して20町ぐらいの畑を作ったのですね。それを貸していただけることになった。小麦播くまでの間に畑を起こせればよいからといわれてね。6月にプラウかけ、その後すぐロータリかけていたのです。その時、うちの社長にしたらロータリまでかけて種播ける状態にまでしてあげたのだから、伊藤さんからお礼を言われるだろうくらいに思っていたそうです。ところが上富良野っていうのは非常に硬い沖積の重粘土で、あの暑い日の炎天下にロータリかけたら土はゴロゴロ。そんなことしたらどうなるかお分かりでしょう（笑）。土は砕けないですよ。

社長が伊藤さんにお礼いってもらおうとして声をかけたら、即座に「あれはだめだ。どっちみち僕がやり直すから気にしないでいいよ」といわれたそうですよ。社長にしたらショックでね。あの農業談議が大好きで土づくりを語る社長が、農家なら誰でも知っていることを知らなかった。「社長の私がこんなに農業知らないで、ならば社員はどうなんだ。うちの会社は経営を間違う」って思ったそうです。社員にそのことを知らしめなきゃならん。そのために農家の皆さんに集まって話し合ってもらい、その周りで社員も話を聞かせてもらおう。そして農業を学ぼう。というのが社長が初めて呼び掛けた時の会社や社員にとってのテーマだったように思います。

会社に対しても、社員が一度も考えなかった技術的な事も随分苦言を言って下さり、いろいろ教えていただいた。こんなことは初めてでした。まあ、事務局あるいはスガノの社員としての気持ちとはそんなものでしたね。

石川　だから何度こきつかわれても大丈夫だと（笑）。

心してしまい、危機感を失ってしまう。いつか活力のない状態に陥ってしまうものです。今農業が「厳しい」なんていう人たちがいるわけですが、開拓当初のことを考えてみたら天国のような話ではないのか。先代がりっぱな仕事をしていても喰えるようになった今、後継者がその財産を食い潰してしまうということもありはしないか。後継者は自らが先代とは異なる創業者だからこそ後継者たりえるのだともいえます。そうでなければ、後継者とは単なるゴクツブシかよくいって資産管理人であるにすぎなくなってしまうのではないでしょうか。その辺を皆様どんな風にお考えでしょうか。

後継者たちよ村を飛び出せ、もっともっと目を開け

石川武　私自身は、さっきもいったけど、今、共同経営で１３０町歩やっているわけだけども、これは土を考える会に入ったからできたことだと思います。あの時の勝部さんがいなかったら現在の自分はなかった。あの時の90町歩のままで終わりですよ。勝部さんを前にしてこんなことというのなんだけど、あの時勝部さんは「ここにお集まりの方々は、少なくとも粗収入１億円以上の方々だと思いますが……」とやったわけですよ。その時、上富良野の伊藤孝司さんは「今に見てれや」と思ったというのです（笑い）。彼はその当時17町歩しかなかったはずですよ。そして彼は、やがて三町一市にまたがる畑を持つようになった。そしてフラワーランドまで作ってしまった。

なぜそうなったかというと、その当時、この会に参加することで初めて、自分の町村を離れた全道レベルの優秀な人々の話を聞いたり、見たり、そして自分を見つめることができたわけですね。村を飛び出すきっかけになったのですよ。視野が広がったのです。自分が劣っているなら、いかに優れた人に追い付き、そして追い越すかということに励みを持ったわけです。

今の若い人は、なまじっか学校を出ていたりするものだからコンピュータかなんかいじくって「自分の経営はこれでよし」などと思っているわけだ。今の人たちはそもそも人の話を聞こうとしない。若い中核会員たちや事務局も大変だと思うけど、若い会員たちに自分の知恵だけでなくもっと人の話を聞くチャンスを作って欲しいし、「人の話を聞く」「人のやっていることを見る」という姿勢を育てることに努力してほしい。これは勝部のおじいちゃんの遺言を代弁するようなこととしていっておきたいのですよ（笑）。

司会　そういえば、勝部のじいちゃんの話、聞きたいね。

石川　また、うちの若いもの連れて勝部さんの所に遊びに行こうと思っている。話を聞かせたいこともあるけど、実際の勝部農場をもう一度確認させるためにね。道具使えば使いっぱなし。それを叱るとうるさい親父だと怒りよる。勝部さんとこ行こうとね。勝部さんとこならそんなこと絶対無いぞってね。連れていきますからよろしくね（笑）。

勝部征矢　あんまりそういうことといわれると我が家が困る。一生懸命なのはこっちなのだから。うちの息子になんていったらよいのか（笑）。

石川　行く前にきれいにしておいて貰えばいいのさ（笑）。

農地の名義は自分でも、それは管理責任のある預かり物と思え

石橋明　ところで、勝部さんはこの後も麦を続けるのですか。

勝部　そういうことでもないですよ。ただ私は、農業も社会の一員である。そして農業はそのなかで何をせねばならないかということを考えるべきだと思っている。農業の社会

座談会出席者 PROFILE



石川 武 氏
農業法人石川組合 理事
（網走市）

昭和２年網走市生まれ。昭和 28 年分家独立後８年間自主経営。より一層の規模拡大・所得アップを目指し昭和 36 年農業法人石川組合を設立。兄一郎、二男武、三男茂の三兄弟でサラリーマンのような収入を目標に共同経営を始め、現在に至る。118ha の経営耕地に麦を中心に、馬鈴薯、ビート等を栽培する。土を考える会には設立時から参加、同会初代副会長を 15 年、初代道東支部長を 10 年務める。現在、北海道土を考える会役員。



駒谷 信幸 氏
農事組合法人 駒谷農場理事
（夕張郡長沼町）

昭和 17 年生まれ。昭和 41 年兄克明氏と農業法人駒谷農場を設立、順次規模拡大し現在は長沼町に水田 52.5ha、畑 20ha、様似町に牧草地 270ha を有し肉牛生産をする。現在構成員は７名。時代を先取りしたスケールの大きい経営感覚は労働時間やコストの低減のみならず、消費者ニーズに合った農畜産物生産を実現している。平成８年３月第 25 回日本農業大賞(個別経営の部）ならびに農林水産大臣賞を受賞。

的使命というものがあるのであり、そこが肝心なのだとね。麦作りのことを農業をする僕の使命感ということで考えている。

少し話が飛躍するようだけれども、僕が子供だった戦後すぐの時期には日本の国民の中で餓死者が出るという時代もあったわけだ。その時代は、食糧増産することが国民に喜ばれることであったし、農業者は国民を飢餓から救うという社会や国家に対する使命感を素直に持てた時代だったのだと思う。しかし今は違う。「いくらコストがかかってもいいから餓死者をだしてはいけない」なんていう農業の立場や使命は、マッカーサー元帥がアメリカからメリケン粉を緊急援助で持ち込んで日本を食糧危機から救った時点で終わっていたのだ。しかし、その後でも「増産、増産」の時代がつい最近まで続いていたよね。だとしたら農業って何だ。それは自衛隊と同じで「有事」に備えるということなのではないかと思う。稲、麦、野菜、牛という作物のことではなく、将来にわたっていざとなったら何でもできる「農地を確保し保全する」ということなのではないか。それが現在の農業の使命というべきものではないか。そのためには、優良な農地を大した金もかけないで次世代に確保していくには、とりあえず麦だな、と私は考えるわけさ。

石川 うまくまとめるな（笑）。

勝部 なぜそんなことをいうかというとね、先程、昆社長が農業というものがどういうところに軸を合わせてやっているのかと話されたが、一番弱者なのか、中間なのか、それとも最高レベルに合わせるのかと。僕の場合はそういうことではなくて、今いった使命感を持てる者、それを経済的に果たせる者ということで考えたいわけだ。

私の所は１５０町の経営です。労働力としては、息子が一人前で彼のカミサンは子供で忙しい。私は口は一人前でも実際には０・７人、女房はもう少し落ちて０・５人。忙しい時期には人も頼んでいるが、その分は請け負いの面積をこなすから相殺して、多く見積もって２・５人の労力で１５０haをこなしている勘定だ。すると一人当たり60ha農地を維持管理していることになる。例えばの話ですが、私の属する栗山農協だけを例にとってみると、当該地区の田畑の総面積は６万ha弱です。そして農協の正職員は１１０名、臨時が15名。合計１２５名がいるわけだ。それで６万haを割ると、一人当たり48haです。農協職員だけでです。我々の経営は世間で一般的ではないにしても我が家では一人で60haを管理しているわけです。しかもその管理水準はこれから5年か10年後にはリタイヤするであろう人々が管理している畑と比べれば、あらゆる面から見て次世代の人々に喜ばれるものだという自信がある。それだけの農地を維持もしているし作ってもきているという自負はある。そして、次が肝心なところだけど、仮に１５０haの畑が勝部の名前で登記されていたとしても、勝部は農地の「管理人」に過ぎないと考えるべきなのです。だから、管理者としての能力が無ければ所有を放棄せねばならないのは当たり前なのです。それが使命感ではないか。土地というのは、私のものでも、石川さんや石橋さんのものでも無いのさ。未来に向けてはね。地球的規模の、人類の財産なのさ。また、昆さんも農家でないといっても食糧として子供や孫がその農地の世話になるわけだから関係なくはないのさ。だから、多少のコストがかかっても「勘弁してよ」と我々はいってもよいが、ただ、農民や農業関係者が土地を管理しているということをたてにとって無駄使いすれば、「米価や麦価を下げるよ」という話も出てこざるを得なくなる。農地は皆の持ち物だ。だから適切な管理をせねばならない。そんなわけで、自分に

座談会出席者 PROFILE



石橋 昶氏
農業
（帯広市）

昭和２年帯広市生まれ。小麦 45ha、スイートコーン 12ha、大豆 10ha、緑肥デントコーン 5ha など計 72ha を家族経営。経営の中心は子息の典之氏に移譲している。家族は夫人と子息夫婦、孫４人の計８名。麦を中心にした省力低コスト農業を目指している。勝部農場の影響を受けて、麦による規模拡大に熱心だった本人であるが、後継者は家族の和、笑顔を大事にする農業を大切にしている。



小野寺 俊幸氏
農業
（常呂郡常呂町）

昭和 26 年常呂町生まれ。酪農学園卒業後アメリカで１年間研修。農協 4H クラブ、青年部全道部会長を歴任、現在 JA 常呂理事。平成６年より土を考える会３代目会長に就任、現在に至る。「土地は個人のものではない」「競存共栄」をモットーに地域が生き残れる農業を模索する。30ha の畑に麦、馬鈴薯、ビートの他、玉ネギ、ゴボウなどの野菜を栽培する。自家経営の他、地域内の離農地で友人との共同経営を行なう。その経営に地域農業発展の可能性を模索している。

とっては、いろんな要素を考えて麦を作るのが農地を管理する手段として一番よいという判断なのだ。だから、将来、麦を作るともいえないし止めるともいえないのです。

　指導者たちは農家に向かって、安全な食品だとか、野菜を作れとか花を作れとか高付加価値作物だとか色々のことを「指導」するけど、そんなものは需要があれば自然発生的に作る人が出てくるものなのだ。10年、20年後の農業を考えたら、いかに農地を保全するのかということの方が大問題のはずですよ。行政などの立場の人は、自分たちが面倒見てやらないと農業が崩壊してしまうような気でいるのかもしれないけど、とんでもない話だ。農業が農業経営者が社会の中で何を果たすべきなのかということが本当の意味で語られるべきだし、そういう経営者の言葉を行政担当者はもっと受け止めて欲しい。これが、僕の麦作りの話なんだ（笑）。

いつまでも平和ボケの馬鹿な国？　そんなノンキな時代じゃないぞ！

村井信仁　次世代に良い土を残すために麦を作るという勝部さんの話、救われるような気がします。日本の食糧自給率が低過ぎるという議論はされるのだが、具体的な方策は何も出てこない。実はこれは日本経済新聞に試算が出ていたのですが、日本に輸入している食糧を日本の平均収量で割ると面積が勘定できるわけだけど、それは１４２０万haだそうです。日本の食糧輸入を面積換算にするとそうなるわけですね。日本の耕地面積は５１０万haだから、面積換算にした日本の食糧自給率は実は26％しかないということになる。食糧自給率はカロリーベースだとかいろんな言い方があるけど、とにかく現在１４２０万ha分の食糧を世界から輸入しているわけですね。自動車や電気製品が世界に売れて、たまたま今、金があるから買えているわけです。

　だけど経済は30年周期で変動するという。日本は成熟期から後退期に入ってきているわけで、将来にわたって１４２０万ha分の食糧が買えるなんて保障はどこにもないわけですよ。あまりにも低過ぎる自給率なのです。それでいて毎年４万haの農地が住宅や工場に転用されてきているわけです。こんな平和ボケの馬鹿な国はないのかもしれない。ガット・ウルグアイラウンドの締結以来、低コストだとか省力化だとか変なことばかりがいわれているけど、そんな贅沢いっていられる状況ではないのですよ。たまたま金があるから呑気にしているのだ。また、農業生産コストも今の円高ベースでいったら高いに決まっている。10年、20年先を考えたらとんでもないことになる。土作りが簡単にできるなら話は楽なのだけど、そんなものではない。だとしたら、我々が10年先を予測したシフトを考えていかなければならない。抜本的な土作り、土壌、土層改良、そして単位面積当たりの収量を上げる努力が今こそ必要なのです。とにかく農耕地がないのだから。

勝部　どうなんだろうね、いろんな技術開発があって、その結果プロの技術・経営レベルがさらに繰り上がってしまい、また素人が追いついていけなくなる。10年経つとね、人数は減った上に農業就業者の平均年令が僕の上（58歳）にいっちゃう。地方の社会生活の中ではとりあえずこの就農人口の激減という問題を兼ね合わせながら考えていかなければならないと思うんだけど、そのへんがどうもムズカシイ……

村井　でもどうですかね、日本経済が陰りを見せてくると話も変わってくると思うのですね。とにかく食いぶちをどうしても稼がなきゃならないとなったら私は新しい農業の見直し論がでてくると思います。それから農林省の後継者対策や過疎対策もどうも腑に落ちないところがあるのですね。過疎になるというのですが、一方では全国的には20ha規模の農家を多くしようというのに、半面で過疎が問題だという。１戸の規模を大きくすれば何人かは辞めなければならない訳でしょ、矛盾したことをやっている。そしてわざわざやりたくないという人にトラクタ買わせて農業させようとしている。そんなことしたってしょうがないわけでしょ。

　だから本気になってやるという人をどうバックアップするか、それから農業に見切りをつけて外に出ていく人の生活が成り立つようにどうバックアップしていくかを政府は考えていただきたい。それから農村の人だって過疎になるというけれども、昔の人は馬車を仕立てて町に買物に行くのに１時間かかったのに、今は５分だよ。札幌から東京へ会議に行くのに昔は５日か６日かかったけど今は２時間でいけちゃう。地球は狭くなっているのだから過疎と思うのは気持ちの問題じゃないかな（笑）。ですからそういうことは時代で内容が変わっていくと思うし、もっと面白く農業をやれるような国作りというものが何かあってもいいと思う。

家族の円満、畑に貯金をしながら農家の暮らし方をもっと伝えよう

司会　どうですか、石橋さんや駒谷さんは。経営の変わった点だとかは。

石橋　私は、後継者の問題だとか嫁さんの問題だとかはどこいってもあると思うんだけれども、いかにして楽しい生活が農業の世界のなかでできるかということを、つまりこっちに彼らを引っ張ってくるようなことが見せられるかどうかだと思います。私は皆様にお付き合いをさせてもらって見本を見せてもらい、私なりの経営をやってきました。石橋ができるくらいのことなら俺にもできるという人はたくさんいるはずです。地域に対してはそういう形で何とか役に立っていたかなあと思っています。うちの嫁も来て16～17年になりますが、子育ての間はうちの中にばかりいる。もともとが農家の人ではないですから。そういう人が来てつとめてくれた。ぜんぜん農業の経験の無いものが来て、何とか円満にやっていくのをみてもらう。あそこでやっているぐらいの事ならうちの嫁さんにも、私にも充分にやれるというようなことはあると思います。まあいざこざもないそんな家族の形が隣近所にも増えていってくれればいいなあと思っています。結局何が大事かというと家庭の円満なのですよ（笑）。おらみたいのもこうして楽しくやっているんだから大丈夫というような事でいきたいなと思います。

司会　そのためにはやっぱり経営の安定、経済の事を考えていかなけりゃね。

石橋　投資に関してはね、金なんかおっかなくて銀行になんか預けちゃいられないから畑に貯金をする方がいいんだ。そういうことに私は徹しています（笑）。

全員　本当だね。銀行も農協もだめだわ（笑）。

農外女性が男を変えているように「人材自由化」が農業を活性化する

村井　今、後継者の話がでたけどね、土を考える会では「後継者がいない」というのは自分の息子を説得できるような経営をやっていなかったんじゃないか、とよく話していましたよね。

小野寺　親白身がおのれの身を正して自分の経営をきちっとしないと後継者も育たないし、また後継者もしっかりしていれば嫁さんだってくるんですよ。

勝部　僕の家もそうなんだけども、うちの周りを見ても農業の経験が無かったり、じいちゃんも両親もまったく農業とは関係のないお嫁さんが今農村に結構多いんだよね。むしろそのおかげで男たちが変えられてきているような気がする。

　農業をどうやって活性化するかという問題なんだが、補助金付けてやることでもなければ素晴らしい機械を開発することでできるわけでもない。一番先にやらなきゃいけないのは農業に対する「人材の自由化」ではないか。これが一番いいと思う。もちろん失敗もあるだろうけど。それでも「農業に他から人が入ってくるぞ」と威（おど）かされるだけでも農業は変っていくのではないだろうか。例えば米が輸入されるといっただけで、もう誰も米を値上げしろとはいわなくなり、何とか据え置きにして下さいというぐらいしかお願いしないわけさ。

　だから農業の中に自由に他人が入ってくるよということになったら少なからずや「こりゃ大変だ。俺もがんばらにゃ」という若者だって相当出るはずだ。しかし、現在は「君以外に人はいないんだから頑張れ」などととんでもないことというからね、「それだったら俺も据え置きにしとってもいいな」なんてことにな

座談会出席者 PROFILE



村井 信仁 氏
北海道農業機械工業会専務理事（札幌市中央区）

昭和７年福島県生まれ。昭和30年帯広畜産大学総合農学科卒業。山田トンボ農機㈱、北農機㈱、技術協力専門家として東南アジア各国での勤務を経て、昭和42年道立中央農業試験場農業機械科長。昭和60年同農業機械部長等を歴任の後、平成元年より現職。現場の経営に根ざした指導は道内農業者の評価が高い。会の顧問的存在で、現在は「北海道農業機械フェア in Kamifurano」の主催団体の一員でもある。本誌連載執筆者。



田村 政行 氏
スガノ農機 芽室営業所所長（河西郡芽室町）

昭和27年士別生まれ。東京でアパレル関係の職場に勤務後、昭和51年スガノ農機入社。上富良野営業所を経て、昭和57年より芽室営業所に勤務。この仕事についたことから農家出身のお嫁さんを希望し、それがかなう。土を考える会発足時点から事務局員として作業をし、それを通して農業を学ぶ。常に農業者の気持ちが理解できる営業マンであることを目指している。

る。行政はその辺の腹を読み込んでいて嫁さんがいないって騒いでいる。農民をもうちょっと入れ替えようといっただけで実際に行動取らなくたって頑張ろうと思う人がかなり増えるんでないか。

経営の後継者は自分の子供でなくてもよいではないか

小野寺　自分の息子が後継者だというのではなくて、誰でも企業感覚で自分の農場を継承してくれる人がいるというようにならなけりゃね。勝部農場は永遠に続くけど勝部農場の経営者は明日から石川さんかもしれない。でもそれは勝部農場の歴史をふまえたものなのだという、新しい感覚の農業の中で後継者対策を考えていかないとだめですよね。

勝部　そういうことで、農政の問題があるのだ。例えば僕が今リタイアするとしたら、何か退職金代わりのものが欲しいよね。他人に売れば補助の対象になる。だけど家族の場合は別なんだよ。親子関係は他人と見ないわけだ。その辺がもう政府のいっている後継者問題と農業の事業的発展を志向することの矛盾があるわけさ。

小野寺　売らないでもやれる方法があるわけだし、新しい農業の感覚で行けば次の社長になる人が全部株をもたなければ社長になれないわけじゃない。他の企業でも農業でも有能な人材であれば社長はその家の息子でなくていいわけさ。そういう経営者が農業にも育って欲しいですね。そして勝部さんがいわれる通り土地はただ国から授かっているだけなんだから誰が授かってもいいわけだ。だから勝部農場の資産は誰か他の経営者に管理させて自分はオーナーでもいいわけだ。

勝部　だから石川農場にしても石橋農場にしてもそういうスタイルができ上がっている農場は、意識の上でも解決されていてその必要はないわけなのさ。むしろスタイルができ上がっていない農家のためにこそそういう農政上の整理が必要なのだ。

小野寺　ちゃんと土に金をかけている農場はそういう形で誰でもきちんと継承できるんですよ。ヨーロッパの農場の様に１００年も２００年も続いている農場があるっていうから行ってみてもさ、先祖代々２０００年続いているなんてのは日本の府県の農業だけですよね。

　ではどうしているのかというと、マイケルの農場は２００年、勝部農場は１００年続いているけどもその間に経営者は何人も変わっているわけですよ。それじゃあんたもマイケルかいって聞いたらいや俺はスミスだっていう農場主ばっかりで、じゃあ誰が経営者だと言ったらここの土地を持っているのは〇〇男爵だとか△△伯爵だとかっていうのがヨーロッパにはたくさんいるとかね。日本も勝部さんがいうようにそれぐらい人間の自由化をさせて、後継者は誰でも好きな人が農業経営に入ってきて、できるシステムをもっともっと考えないとね。

勝部　それが進んでいったら農民にとって競争相手ができて辛くなるように考えるかもしれないけど、むしろそれは刺激になって農業が活性化するメリットの方がデメリットよりずっと大きいと思う。

小野寺　嫁さんの問題なのだけど、嫁さん貰えないのは農業後継者だけかと思ったらそうじゃないでしょ。40過ぎた独身なんて農業後継者以外にもたくさんいる（笑）。何も農業だけとかいうことを考えなくていいと思うんです。それを何か農業だけが後継者問題や嫁さん問題があるかのようにいう。余計なお世話だというの。

本誌　今日ご参加されているような経営者の方々が語る「正論」は強者の独り善がりの意見として排除され、またそういう人々が生まれ、成長することをわが国の農業界は意識的に排除してきた。体裁の良いオタメゴカシで騙されているけど、これまでずっと農業の経営者は農水省や農協であって、農家はいわば作男の位置に置かれ続けてきたわけです。主体意識を持った農業経営者の立場にたつことを邪魔され続けてきたのではないでしょうか。

勝部　いや作男ならカワイイわ。奴隷だよ（笑）。

本誌　その結果、農業に関連する業界も、お客さんとしての農家を見つめるのではなく、その向こうにいるお金の出所である行政や農業団体の方を向いて商売をし続けることになった。そこにある利権にあずかるために。しかし、そんな楽な商売をし続けてきた業界もまた、なかなか自己改革ができず体質を変えられないでいる。補助金漬けの農業が弱いように、企業も利権を与えられればそれだけ体質が弱くなっていくのです。また、農業へのオタメゴカシを言うことより他に言葉がなく、もとより自らの存在理由を問えないような多くの行政や農業団体関係者たちは、天からお金が降らなくなってきている今、右往左往しているわけです。一方、農家も自ら意思決定する経営者の立場に置かれてこなかったために、やはりお上の方を向いてい

て、農産物を買ってくれる「お客様」のことはあまり考えない体質が身につき、それが事業者としての成長発展を妨げているのではないでしょうか。むしろ、実際の農産物を買ってくれる消費者のお客さんや、川上でなく川下の企業のなかに、真剣に日本農業の未来を心配している人もいるのです。

それこそ勝部さんのいう使命感だとか、石橋さんのおっしゃる土に貯金するなんて発想がなく、楽して食える場所を求めて、しかも自分だけは生き残りたいという惨めなサバイバルゲームをやっている。なぜ、土を考える会のメンバーが生き残り発展していくのかということを、農業経営者だけでなく農業関係者にも考えていただきたいですよね。

俺を真似るな、好きにやれでも、君は何がしたいのだ

駒谷　僕自身も農地は自分のものと言うよりは共有の財産だと思いますし、いろんな面で皆さんがおっしゃったことと同じ考えです。それで僕の農場はどうなのかというと、僕個人には年金がありますからね。家内と二人で年金を貰えば農協の職員と同じぐらいの生活は出来るので老後の心配はないんです。だから子供たちに限らず農場を継いでくれる人に農場をやらせたいと常に言ってきたし、今でもそう思っています。たまたま弟の息子と僕の息子と娘がやることになっただけだ。そこで息子達には、若い人の役割として、絶対僕たちがやってきたことをやってはならない。僕が今までやってきた農業をお前たちがやろうとするのは駄目だぞといっているんです。それは何故かというとやはり時代が大きく違うし、これからも変わって行くだろうから、自分がやろうとする農業をやれよ、お前たちのやりたいやり方を目標を持ってやれと。全く農作業労働をやらない農業経営があってもよいではないか。

僕が長年農業をやっていて疑問に思った事は、たまたま政府の干渉作物が多かったからかもしれないけど、自分で自分の作った作物に値段をつけることができないということでした。ですから今後は自分の作ったものを自分で値段をつけて売れるようにならなきゃいけないと思うのですね。そのためにはやはり直販店舗なり加工施設なりを充実させていかないと。やみくもに規模を拡大してコストを下げようとしても今の諸外国との経済関係では外国産のものにコストで勝てる戦いはありえない、と僕は思っています。

ただ、あくまで自分が何をしたいのか、やろうとする農業が何を目指しているのかということを確認して、何のために農業をやるのかという問いをもつ必要があるのだといっています。息子たちに、もしお前たちがやって経営のバランスを取れなくなるようなことがあれば、いつでも辞めさせて、経営者としての責任を取らせるからなといっている。同族会社の悪い面を引きずって潰れる企業も多いと聞きますが農業経営もそれと同じだからです。それと、僕は農業やっていて作物を作るのが好きなのか、それとも農地を作ることが好きなのかと聞かれたら、やはり農地を作る方が好きみたいだなあという気がしますね。

村井　良い土を作れば黙って作物は育つものだからね。

「男のロマン、女の不満」ではなく「男の怠慢、女の不満」なのでは？

小野寺　先輩たちの話を聞いていて考えるのですが、北海道にはたくさんの農業後継者がいると思います。いないいないと言われる中でも結構いる訳です。けれども、夢とロマンを抱く若い者が少なくなり過ぎちゃったのではないかなあと感じます。今日、皆様のお話を聞いていて、やはり次世代の経営者がどっぷりと自分の親の経営につかり過ぎてしまっていて、次に何を目指そうかというのが無いということに自分でも危機感を感じているわけです。で、駒谷さんとか石川さんのような法人経営ではすでに国が新農政で示しているような経営を実現されているわけですが、じゃあそればっかりが解決の糸口かといわれるとそうでもないと思います。次の20年、21世紀がこの2、3年のうちに来るわけです

「土を考える会」は昭和53年6月27日より翌日の28日にかけて、北海道上富良野のスガノ農機の会議室で始まった。27名で開かれた同会は、農業経営者自身の手作りの経営研究集団として翌年には会員数160名（同志交歓会参加者550名）が集まる会合に発展した。第4回（昭和56年）からは土を考える会主催で協賛農機メーカー各社の機械展示会も上富良野町のホワイト農場において同時開催されるようになった。その後、機械展示会と農業機械操作競技会は第16回（平成元年）からは北海道農業機械工業会と、さらに平成7年からは北海道農業機械士協議会も主催団体に参加するようになり、イベントの名称も「北海道農業機械フェア in Kamifurano」と変え現在に続く。

けれども、その中でどのような農業経営をやって行くべきなのか。昔の人たちは「男のロマン、女の不満」で女が一生懸命家を守って草取りをして頑張っていて、男の連中は上富良野の丘に集まって夢を語っていたわけです。

　これからの農業はそういった部分を併せ持ちながら経営者本人だけでなく家族経営の中で家庭や経営を支えてくれる人を大事にしながら、しかも外部の企業社会と同じように共存しながら競争していくという原理を取り入れなければならないと思います。

「競存共栄」が96年の北海道土を考える会のテーマでもあるんです。皆が同じものにどっぷりつかってしまうのではなくて、競争しながら共に栄えていく。農業も関連企業も「競存共栄」をはかりながら新しい道といいますか、仲間を集めて、今まで20年間土を考える会を引っ張って来た先輩方と同じように、この会を守るためというよりは北海道の農業や自分たちの農業の夢を達成するために頑張ろうと思います。自分たちの夢を限りない可能性として見つめ続ける、そんな同志が集えるものにできればいいなと考えています。

勝部　「男のロマン、女の不満」といったでしょう？　それは本当に男のロマンなのかな。例えば学生時代僕等の所へアルバイトに来て、その後何年か勤めてくれて農業者になるって人は、ほとんどの人が町のお嬢さんと結婚する。で、その彼らはほとんど実現しそうにもない膨大な夢を来る日も来る日も語りかけるのさ、彼女に。それで彼女を射止める。だからそこでは男のロマンが不満なのではなくて、「男の怠慢、女の不満」なんじゃないかな（笑）。男のロマンに不満を持つ女なんてほとんどいないよ。自分のロマンっていうのはただ自分がロマンだと思っているだけでパッと見直したらそれが怠慢であったりする場合もあるからね。だから俺は「男の怠慢、女の不満」にしてもらいたいな（笑）。

フランスのＳＩＭＡショーのような農業展示会にしようではないか

司会　どうですか、これからの会への期待等があれば一人ずつ伺って終わりにしたいと思うのですが。

石橋　これからも勉強を今まで以上にやって頂いて、自分の信念をまとめあげていって貰う事が大事かなあと思います。

勝部　難しい質問だねえ、自分の見通しもたたないのに土を考える会はどうだといわれるのは（笑）。

石川　勝部さん、最後の問は例の「土とは何ぞや」さ。あれを思い出せばいいんだよ。

勝部　土はお金もうけになるって話もあるしね（笑）。

石川　あの話の時、俺青くなったぞなー（笑）。白滝の斎藤さんよ。

勝部　土を考える会の中身はある角度から見ればどんどん充実しているともいえるし、大衆性があれば魅力が薄れることも仕方がないっていう見方もあります。土を考える会はいい事をやっていても自分達の中だけで終わらせないで幅広い人に何とかしてこんなのがあるんだよという事を分かってもらえるようにしてもらいたい。

　当時農協あたりの小さい店舗には必ず土を考える会の大きなポスターを貼っていた。そんなに派手ではなくてもいいから、宣伝をしっかりやってもらいたい。というのは、出品する農機メーカーあたりからは不満も出ているわけですよ。人の集まり方が少ないのにコストが掛かり過ぎるとか。もちろん農業機械フェアだけが土を考える会ではないのだけれどこれがメインになっていることも事実だからね。

司会　その辺の話も含めて新しい時代に対する取り組みみたいな事はありますか。

小野寺　若い人たちがどんな期待を持ってそれに応えられるかが土を考える会のこれからのテーマだと思います。北海道の農業機械ショーとして我々がフランスのＳＩＭＡのショーを見に行くのと同じようにわくわくするものを持って上富良野の丘に集まれる、そういった機械ショーをこれから作っていきたいなと思います。それは農業機械だけに限らず農業を側面から支援してくれるアグリビジネスの方々、こういった雑誌等も通じて支援してくれる人達が皆あの丘に来てくれて、そこに集えれば何かわくわくするお話も聞けて、20年前に皆さんが思った土を考える会をここまで育ててくれたのと同じ気持ちになるようなものを何か一つでも作り上げられればいいなと思っています。

　我々もちょうど皆さんが20年前に会を始めた年代だと思うんですけども、この年代が今を出発点として、土に触って土の暖かさを次の世代に伝えていくことの大事さ、そしてそこに先輩たちがやってこられたあらゆる問題を土に返って捉え直していくものの考え方、われわれもそんなことを大事にしながら次の土を作り上げていき、会そのものを耕していきたいと思いますので、まあ先輩の

方々も今後ともどうか一つよろしくご指導いただきたいと思います。

農業の外部の人たちとの関係をもっと深めていこうではないか

駒谷　今年、農業フォーラムということで僕自身も来いといわれてるのだけどね、僕らのようなレベルの人を講師にしても駄目だろうと思うのですね。初めての土を考える会の時に勝部さんや牧野さんの言葉というのが印象に残っている。僕なんかと迫力が違うのだ。あの2人のお父さんはともに身体障害者だったのだけれども、その人たちから「お前ら5体満足でありながら何やってんだ！」というようなことをいわれた時には本当に驚いた。そういう役割を演じられる方を呼んでくる必要があるのだと思いますね。

勝部　駒谷さん、あんたも立派な障害者だよ。皆高校出ているのにあなただけ小学校しかでていないんだから（笑）。

駒谷　農業関係以外の所にはどういう作業をしておられるんですか。というのは、以前に日本消費者協会の方が視察にきた時に「日本の農産物は機械化されていないから高いのだと思っていたけど結構機械化されてますね」などと言われました。その方は消費者協会の副会長で、農政審議会の委員だかしている人ですよ。「全部機械化じゃないですか」とおっしゃる（笑）。非常に農業というものを理解していなくて、昔ながらの農業をやっているからコストがかかるんだとそれまで解釈していたというのですね。

　それからたまたまある財界の方々とお話しする機会があって、農業の自給率の話なんかをしたら、何百億円という会社を運営している方々なのだけれども農業のことなんか考えたことも無かったという。で、本当にお前がいっているみたいに農産物を輸入しなかったら4ヶ月ぐらいで日本の食べ物は無くなるのか？　なんて社長さんたちが聞くのですよ。今、輸入されたものを含めて農産物があふれているもんだから。食物の安全性だとか、食糧自給だとかということが代表的な企業人たちも理解していないんだなあと思いました。そんな消費サイドの方や異業種の方々への呼びかけも必要ではないか。

海外を見越した国際性の獲得と目標意識を育てる雰囲気作りを

司会　最後に村井先生からアドバイスを一言。

村井　土を考える会の設立当初のメンバーはある面ですごくやりやすかったということもあるんですね。戦争が終わって食糧が無い。よし北海道を農業基地にするという目標がありましたし、もう少し頑張れば大規模経営も可能だったという条件にも恵まれていた。国自身も戦争に負けて3等国だなんていわれたくやしさで、欧米に追い付け追い越せをしていたというように目標をはっきり持てたのです。だからある面ではやりやすかった。初めてのことをやるという辛い場面もあったのですが、目的達成のための目標という大名目があったからやりやすかった。53年の頃にはだいたいある程度の目的を達していたわけですが、会員たちはまたこの土を考える会に出てきて切磋琢磨することで新しい目標を持ったということでないでしょうか。

　しかし、今のような成熟期に入ると新しい目標をどう持つかで苦しまなければならなくなる。そうすると目標を持てと言うのではなくて目標を持てる雰囲気作りが必要なのではないか。あそこの会にいけば何か勉強になるだけでなく何か新しい目標が持てるに違いないという。持てと言っても持てるもんじゃないわけですから。

　それをしないと大変になるというのは、最近私は東南アジア関係の人たちとの接触が多いのですが、韓国、中国、タイにインドネシア、どこでもそうなんですが皆日本に追い付け追い越せなのですよ。彼等の方がはっきりとした目標を持っています。目標を持った時というのは人間強いですから。

勝部　毎年ノースダコタとミネソタとアイオワにいくのだけどね、びっくりさせられるのさ。道内でニューカントリーという雑誌があるだろ。あれに北海道の新品種という記事が出るでしょ。12月に発行された本が4月にもう行っている。出るとすぐに翻訳されて向こうの農家がみんな持っている。北海道の人が「大豆作る」なんて言っているでしょ。向こうの農家が「豆腐と納豆は我々にまかせとけ」とかいうんだよ。大豆じゃないんだよ。向こうの農家が。

村井　そのとおりだ。日本はそういう面でまことにノンビリしている。土を考える会も一つ国際的な視野に立ってみたらどうでしょうね。

司会　話はつきないようですが、これくらいで座談会を一旦締めさせていただきます。

※本特集のデータ（住所、肩書、数値など）はすべて座談会当時のままです。